



美 術 館 は
ぼ くら の
宝 箱

子どもと
楽しむための
ガイドブック

それぞれの人の大切な「宝箱」に

美術館は誰でも開くことのできる宝箱です。

ふたをあけると、

何かを思い出して幸せな気持ちになったり、

逆に心揺さぶられたり、

それぞれの想いを自由に巡らすきっかけとなる・・・

美術館は

そんな「宝箱」のような

存在になれればと考えています。

「美術館はどんなところ？」と子どもたちに聞くと、大抵「絵のたくさんあるところ」という答えが返ってきます。では「病院はどんなところ？」と聞かれたらどうでしょう。「病気を治してくれるところ」と答えるのではないのでしょうか。病院は自分の身に起こることとつなげて考えられているのです。確かに美術館には絵がたくさんありますが、その絵を人々の心に届け「心を生き生きさせる」ための場所ではなくてはなりません。美術館も「リフレッシュできる場所」「静かにひとりの時間を楽しむところ」「好奇心を満たすところ」というふうに、人の気持ちと結びつきのある場所として、心のなかに宿っていくことを願っています。

神奈川県立近代美術館は、これまで「Museum Box 宝箱」という美術館体験キットや所蔵品のポケットガイドなどを通して、美術館に親しみきっかけ作りをしてきました。そうしたなかで、少しずつ小・中・高校生やもっと小さな子どもたちとの交流が広がってきたのです。この小さな冊子は、その交流のなかで出会った人々との時間を振り返って、子どもたちの感想から言葉を借りながら、子どもたちと美術館を楽しむための要点をまとめたものです。

ゆっくりと扉を開いて

私は、美術館に行ったことはあるけれど、
あまり良い印象が残っているわけでもなく、
今日この美術館に来ました。

そして今日美術館がとつてもとつても好きになりました。
今度、家族皆に「美術館ってこんなに心がほかほかして、
たとえ相手にあっていなくても、話をしていなくても
相手がどのような気持ちでいたかがわかる」ってことを
教えてあげたい。

(小学4年、A.0)

美術館は絵や彫刻などを「見ること」を通して、人間やこの世界のこ
とに考えを巡らす場所です。多くの大人は、子どもは深く考える知識
も経験もまだ少なく、美術館をあまり楽しめないと思うかもしれませんが
。しかし、逆に子どもたちは知識や経験が少ない代わりに、自分の感
覚に正直に「今見えているもの」から想像を広げて楽しむことができ
ます。その点では大人も教わるところがあるくらいです。でも、まだ慣
れない子どもたちと来館する時はぜひ少し準備をしてください。

- 1：美術館に行くことを事前に話す。
- 2：どんな体験ができるのかを伝える。
- 3：美術館でのルールについて話す。

たとえば、子どもたちと先生が美術館に来る時には、前もって美術館
の絵地図やルールブック、展覧会のポスターなどを送り、教室に貼っ
てもらっています。そうして美術館で見る絵や美術館の建物を目にし
ていると、それだけで気持ちのどこかで美術館とつながり始めるので
す。また、子どもたちは大人から美術館はどんなところで、どのように
楽しめるのかを聞くと、美術館での時間を想像し始めます。そうす
ると実際に美術館に来た時の子どもたちの心持ちはずいぶん変わっ
てくるのです。紹介した感想を書いた4年生は、学校で「Museum Box 宝
箱」で遊んで、その後に美術館に来たので、展示されている絵とじっ
くり対話することができたようです。美術館への扉はゆっくりと開い
てください。そして「心がほかほかする」美術館体験を導いてください。

心落ち着ける空間をもつ

5年生の時、
始めて授業で美術館に行くことになったときは戸惑った。
なぜなら美術館って「大人」の入る場所でしょ？
そして9月のお弁当の日、クラスで鎌倉館に出かけた。
入り口では少し戸惑ったものの、
中に入ってみると、いつも友達と一緒に私も
なんか「ひとり」になれる気がした。
やっぱりそうだった。
静かに絵を見るなんてつまらないと思う反面、
ドキドキ、ワクワク胸が高まる。
「ひとりっていいかも・・・」
「落ち着ける・・・」
「なんか、美術館って子供の私でも楽しめるよ」と、
私は思った。

(中学1年、アレン)

大きな部屋に、普段は見ることのない作品が並んでいる美術館。子どもだけでなく、大人でも久しぶりの美術館は少し緊張するものです。それは美術館にはたくさんのエネルギーが詰まった絵や彫刻があって、展示室ではその作品から見えないエネルギーをシャワーのように浴びるからかもしれません。美術館は心地良い緊張感がある場所です。

美術館に行く日のことを少し前から想像し始めると、子どもたちの緊張感は「ドキドキワクワク」と良いものにつながりやすくなります。突然その日がやって来て心の準備ができていないと、緊張を取り払うかのように、無駄なおしゃべりをして作品をじっくり見ることができなくなります。展示室では、10歳ぐらいまでの子どもなら、大人が寄り添って、文字のない絵本と一緒に読むように心が落ち着くリズムをつくってあげてください。もう少し年齢が高い学年の団体での見学ならば、なるべく普段一緒にいる友達と離れてそれぞれがひとりになれる状況をつくった方が、自分の気持ちを解放して絵と対話しやすくなるようです。絵を見るのは新しい友達をつくる時と同じような感覚で、気になる絵とはじっくりと話して、ちょっと気が合わないと思う作品は通り過ぎて良いのです。心落ち着いて作品を見るのが面白い、と思える体験を引き出してください。

子どもの鑑賞ジャンプ力

絵は目だけで見るのではなく、耳や鼻でもみると、
びじゅつかんのたのしさがわかるとおもいます。
でもたのしいといっても、わらったり、
あそんだりしたときのたのしさではなく、
びじゅつかんだけのたのしさです。

(中略)

わたしがびじゅつかんでやってみたいことは、
てんじされている絵のせかいには行ってみたいです。

(小学2年、かのは)

小さな子どもと一緒に絵本を読むと、食べ物が出てくれば食べるまねをしたり、においがするような場面では鼻をくんくんとさせたりして、絵本の世界に入って楽しめます。仕草をすることで、より想像が広がるのでしょうか。美術館でも、子どもたちは絵の知識が全くなくても、目に見えているものから想像を広げていきます。作品の見方にはたったひとつの正しい答えはありません。作品を見ながら、自分の心のなかで起こる意外な想像に驚いたり、新しい世界を見つけていくことに創造性と楽しさがあります。作品を見ながら、自分のなかでさまざまなことを組み立て直す作業は、手で具体的に何かをつくり出すのと同

じくくらいに、とても創造的な行為です。

子どもたちには「鑑賞ジャンプ力」とでもいうような、しなやかな鑑賞能力があります。大人がつい見逃すようなことに気づき、発想することができます。ですから大人は作品と子どものあいだに起こる「見て考える力」の相互作用を信頼して、絵の知識を教えるよりも、絵とじっくり対話できる状況をつくり出すことを大切にしてください。目に見えるものから想像を巡らすこと、これは誰もが小さい頃からしていることではないでしょうか。有名な絵を前にしても想像を巡らす方法は同じです。子どもが絵の世界にポンとジャンプして入っていく通路を閉じないようにして、絵のなかを散歩する時間をあげてください。子どもの視点に刺激されて大人も一緒に絵のなかを散歩し、「何が見える？」と言葉のキャッチボールが始まれば、鑑賞することがもっと楽しくなります。気をつけなければならないのは、子どもは何かを見つけていても、「求められている答え」ではないと思って言葉にしないことがあるので、心に浮かんだことを言葉にしていという雰囲気をつくり、その楽しさを伝えてください。心に浮かんだ思いを自分でも肯定し、相手にも受けとめられて会話が進むと、鑑賞の視点が広がり深まり、今見えているものから感じることは人それぞれが違うことに気づき、絵を見ることを通して大人も子どもも自分の視点を広げるきっかけとなります。

大切なものに触れること

びじゅつかんはボールあそびとか、
さわくことはできないけど、
びじゅつかんには、たからものがかくれています。

(小学2年、しーちゃん)

自分が大切に「宝もの」がある、という感覚は私たちに安心感を与えます。大切なものには、大抵いろいろな人の熱意が込められていて暖かな気持ちを誘いますし、また何かを大切に思う心持ち自体が快いからでしょうか。子どもたちにとって、大切にされている「宝もの」に触れることは「大切にする」ということが具体的にどういうことで、気持ちとしてどのような感覚なのかを学ぶ機会になります。

物が次々と生産され捨てられていく時代にあって、美術館は特別によく手入れをして物を大切にしているところです。美術館

は社会の人々から託された作品とそこに宿る精神を大切に守り、展示をしています。過去から受け継いだものを今と未来の誰かに届けるためです。そうしたものを社会みんなで大切に、未来に届けていくというアイデアを子どもたちと共有することは、子どもたちの社会的な感覚を育てることにつながります。それは、他の人も自分も大切にしながら「宝もの」を共有し伝えていくことを、一人の市民として担っていくということです。物としての作品を大切に扱うとともに、その物に込められた思いや、それを見て感じた人間の精神の存在を大切にしていくことです。美術館での、触らない、走らない、小さな声で話す、などのルールは、単に「してはいけない」と伝えるのではなく、そのようなルールをつくっている背景、つまり、物に宿っている精神を大切にすることの意味や、それを未来に伝えていく使命、そして他人を大切にしながら、同時に自分も心地よい関係とはどのようなものなのか、ということを考える機会につなげてください。美術館で育むことのできる社会性はさまざまな場面で役立つのではないのでしょうか。

美術館体験の3つのポイント

大人にとって子どもたちと美術館に行くのは、簡単なことではないかもしれませんが。そんな時、子どもたちにとって美術館がどのように有意義なのか、明確なほうがよいでしょう。ここまでの話から3つのポイントを挙げてみます。

- 1：作品を通して新しい世界に出会い、心揺さぶられる経験ができる。
- 2：作品と対話することで、自分が元々考えていた以外のたくさんの視点を発見し、視野が広がる。
- 3：公共の場で公共のものを、自分も他の人も大切にしながら楽しむという社会性を育てる機会になる。

子どもたちの美術館での体験はさまざまです。びっくりするものに出会えるから美術館が好きだという子もいれば、忙しい中学生や高校生のなかには、学校でも家庭でもない美術館でホッと息が抜ける、と感じる生徒もいるようです。彼らひとりひとりの体験の質を生み出すのはその側にいる大人たちです。その大人と一緒に、どのような環境が子どもにも大人にも本当に良いのか、神奈川県立近代美術館はこれからも考えていきたいと思えます。

子どものまわりには学ぶ場が無限に広がっています。ですから、子

どもたちにとって美術館に行くことは不可欠ではありません。しかし、病気にかかったことのない人も病気をしたら病院に行けばいいと知っているように、美術館の存在や機能を知っていれば、子どもたちが成長する過程で、ふとしたきっかけで美術館に行きたいと思いい、その人にとって力や糧になるかもしれません。そのために多くの美術館は社会教育機関として公に運営され、誰にでも開かれているのです。このことをぜひ子どもたちに伝えてください。

美術館はぼくらの宝箱

ここ数年、小・中・高校生と美術館での体験をともにするなかで、「美術館は楽しい」「美術館に来るといろんなことを思い出す」「自分をリセットできる」「世界が広がる」といった子どもたちの本音のつぶやきを聞くようになりました。子どもたちが絵を見ている時、作品は何も言わないで、ただそこにいてくれる・・・それが安心感を生み、子どもたちは絵を見ることを通して自分に向きあい、質的に深く豊かで創造的な時間が生まれるのではないのでしょうか。

子どもたちにとってどのような状況が創造的な体験を生むのか？ 子どもたちを美術館に連れて行きたいと思う大人の方々但至少でもそのポイントを共有して環境づくりをしていき、また次の誰かの「宝箱」が心のなかに芽生え、美術館での体験がいくらかでもその人の生きる糧となることを願っています。

*文中で紹介した子どもたちの言葉は、美術館に来館した子どもたちが先生を通して後日、美術館に寄せてくれたものや、子どもたちの神奈川県立近代美術館での体験について掲載されている「蓮池通信」から引用しました。

「蓮池通信」<http://www.group-rough.net/museum/>

*団体で来館の場合は、来館前の資料の提供、貸出し、来館時の計画などについて相談に応じています。ぜひ事前にご連絡ください。Tel.046-875-2800（葉山館）、Tel.0467-22-5000（鎌倉館／鎌倉別館）、「Museum Box 宝箱」の内容については当館のウェブサイトをご参照ください。

<http://www.moma.pref.kanagawa.jp>

[展覧会]

珠玉のコレクション

美術館はぼくらの宝箱

—子どもたちの視点がくれるもの—

会期：2009年6月6日—9月6日

会場：神奈川県立近代美術館 鎌倉別館

主催：神奈川県立近代美術館

[冊子]

「美術館はぼくらの宝箱

子どもと楽しむためのガイドブック」

絵：インベミスホ

デザイン：今井千恵子 (n.b graphics)

制作：コギト

文・構成：稲庭彩和子(神奈川県立近代美術館)

編集・発行：神奈川県立近代美術館

© 2009 The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama